

発芽ムラが出ないように種子予措をしっかりと行いましょう！

田植時期から逆算して播種作業を

1 種子予措

- ・ 原種の年産を確認のうえ行うこと。特に、貯蔵期間が長い種子は乾燥が進んでいるので水選方法や浸種時間、水温等に注意すること。
- ・ 種子伝染性病害の感染を防ぐため、原種と一般用種子とは一緒に浸種及び催芽をしない。

(1) 供給される原種の年産と水選方法

農業試験場から供給される原種紙袋の表示内容を確認のうえ水選を行う。

| 原種年産 | 品 種 名                  | 水選方法     |
|------|------------------------|----------|
| 4産産  | つぶぞろい、サキホコシ、淡雪こまち      | 水 選      |
| 5年産  | 秋のきらめき、めんこいな、ゆめおぼこ、美山錦 | 水 選      |
|      | きぬのはだ                  | 水 選      |
| 6年産  | あきたこまちR、ひとめぼれ、秋田酒こまち   | 塩水選 1.13 |
|      | 秋田63号                  | 塩水選 1.10 |
|      | たつこもち                  | 逆塩水選     |

注1) 6年産たつこもちは1.14の比重液で浮いた粃を1.07の比重液で塩水選し、沈んだ粃を水洗いし塩分を除いた後使用する。1回目の塩水選で沈む粃の割合が多い場合は比重液の濃さを調整し、約1割程度沈む比重を目安とする(比重液の濃度を濃くすると沈む粃の割合が少なくなる)。きぬのはだは水選のみ行ってください。

注2) 6年産の秋田63号、たつこもちは高温登熟の影響で割れ粃が多くなっている。銅剤で消毒を行うことから、置床後に低温に遭遇すると出芽不良になりやすいため注意すること。

(2) 種子消毒

- ① モミガードC水和剤を乾粃種子重量の0.5%湿粉衣する。(乾粃10kgに水和剤50gをまぶす)。
- ② 湿粉衣後は風通しのよい日陰で完全に乾かす。
- ③ 育苗時には原種苗と一般用苗は同じハウスで管理しないこと。やむを得ず同じハウスで管理する場合は、原種と同様の薬剤を使用する。

(3) 浸 種

- ① 種子消毒剤の効果を高めるため、水温 10℃～15℃を確保できる4月上旬頃を目安に浸種を始める。(水温が10℃以下となった場合は休眠が深まる場合があるので常に水温の計測を怠らないこと。)
- ② 種子袋に入れる種子は容量の50～60%程度とし、品種を間違えないよう種子袋の色等で識別ができるように工夫する。
- ③ 浸種の水槽は大きめの物を使用し、種子もみ1kgに対して水3.5Lを目安とする。
- ④ 浸種開始後2日間は水交換や循環をせず、消毒剤濃度が高い状態にし、その後の水交換は2～3回とする。
- ⑤ 浸種期間は浸種水温10℃で6日～8日、14℃で6日程度とし、粃殻を透かして胚が白く見えるようになった時が浸種終了の目安とする。特に、貯蔵種子は当該年産種子よりも浸種に時間がかかる傾向にあるため注意する。

(3) 催 芽

- ① 発芽を均一にするために30～32℃で行う。その際、内部の種子まで均一な温度となるよう予め36～40℃の温度で湯通しを行う。
- ② 催芽中は水分を切らさないようにし、芽の長さはハト胸程度(1mm)とする。その際、種子袋表面だけでなく内部の発芽も確認する。
- ③ 発芽ムラが見られる場合は、発芽の遅い種子が芽切れするまで十分に行う。
- ④ 品種や年産により発芽速度が異なるので発芽程度を十分観察して催芽を終了する。

2 播 種

- (1) 種子は適度に水切りし、播種精度を高める。
- (2) 播種前に育苗箱(床土)へ十分灌水し、均一播種に努める。
- (3) 覆土は無肥料を使用し、覆土深は5mm位とし覆土後の灌水はしない。

3 育苗期防除

- (1) ムレ苗(苗立枯病)：次の①～③のいずれかで防除を行う
  - ① 床土にタチガレエースM粉剤6g/箱を混和する。 ※
  - ② 播種時覆土前に同液剤の1,000倍液を(500ml/箱)をかん注する。
  - ③ 出芽後に同液剤の500倍液を(500ml/箱)をかん注する。  
※ タチガレエース粉剤は播種5日前までに混和する。
- (2) リゾープス(苗立枯病)
  - ・ 播種時覆土前にダコニール1000の500倍液を(500ml/箱)をかん注する。
- (3) 育苗期いもち病
  - ・ 緑化始期(べた張り辞去後すぐ)にビームゾル500倍液を(500ml/箱)をかん注する。
- (4) もみ枯細菌病
  - ・ カスミン粒剤20g/箱を覆土1Lに混和するか、30g/箱を床土に混和する。
  - ・ 出芽までの温度は32℃を超えないようにし、出芽後の再被覆をしない。
  - ・ 緑化期以降は温度管理をこまめに行い25℃以上にしない。
- (5) いもち病・ごま葉枯病(箱剤による防除体系の場合)
  - ・ ブーンパディート箱粒剤50g/箱(床土混和、播種時覆土前、移植当日のいずれか)またはブーンレパード箱粒剤50g/箱を移植3日前～移植当日に施用する。

4 栽培管理記録等の記載

- (1) 生産履歴を確認できるよう、配布される用紙にその都度記載すること。
- (2) 収穫・乾燥調製作業が終わったら記録用紙を速やかにJAへ提出すること。

たね屋から ひとこと

○ 昨年は採種ほでも倒伏が発生する事態になりました。必要に応じて土壌診断し、肥培管理を徹底しながら優良種子生産を行いましょう。

